

地の果てまで 主よ、あなたの平和を

東京教区戦後五〇年ワーキンググループ報告



はじめに

今年1月、東京教区の姉妹教区であるメーランド教区から、この夏に平和のために共に祈ろうという呼びかけが届きました。これに応じて東京教区宣教委員会は「戦後50年ワ - キンググル - プ」を発足させ、取り組みを始めました。去る8月6日の主イエス変容の日に当たった主日には、各教会の礼拝で用いるよう平和を求める特祷、聖書日課、代祷などを用意し、「平和を願って、これを追い求めよ」と題する主教のメッセージと共に、各教会に配付いたしました。そして、9月9日には、聖オルバン教会で教区礼拝「平和を祈る夕べ」を持つことになりました。この礼拝は、かつては敵どうしとして戦い傷つけ合った日本人とアメリカ人、フィリピン人、韓国人などが共につどい平和を祈りました。

第二次世界大戦後50年とは、日本が、アジアの国々を侵略し、国土と人々を踏みにし、また欧米諸国と闘い、膨大な犠牲の上に敗戦を認めてからの50年です。一人一人の人生に刻まれた戦争体験があります。戦後生まれの世代にとっても、聴き続け、語り継ぐべき戦争の歴史があります。そして私たちは今年「戦後50年」をこれからの取り組みの出発点としてとらえています。

教区時報と共にお届けした、戦争体験の証言を集めた「平和を祈る」は、その一つ一つが痛みと苦しみの記録であり、平和への祈りそのものです。私たちが戦争を体験したひとりの声に耳を傾け、それを読むひとひとりが自分の物語を語り始めるきっかけになるとすれば、これこそが「戦後50年」から始まる私たちの取り組みの大きな果実といえるでしょう。

かつての敵国であったアメリカの兄弟姉妹と共に、また私たちの侵略の犠牲となったアジアの国々の兄弟姉妹と共に、今神様の前で事実を見つめなおし、罪を悔やみ、また嘆きつつ、新しい出発に向かう決心が与えられるように、祈りたいと思います。

1995年11月1日

東京教区宣教委員会

戦後五〇年ワーキンググループ

執事 山野 繁子

目 次

主教メッセージ	5.....
メーランド教区・ティーンズ交流プログラム	9.....
戦後五〇年証言集	13.....
日 記 抄	14.....
お前たちはエリートだ	16...
主の平和	18.....
東京大空襲	20.....
原子雲	22.....
平和への祈り	24.....
戦時教育の体験を通して	26...
東京大空襲体験記	28.....
戦時中動物も犠牲になった	30...
私の子供だった頃 信徒の証言	31.....
私の戦争体験	33.....
『平和を祈る夕べ』証 言 私の十五年戦争	35.....
『平和を祈る夕べ』証 言 私の戦争体験	38.....
『平和を祈る夕べ』証 言 日本軍の侵略による 犠牲者三世からの証言	40.....
9月9日、平和を祈る夕べのつどい	42.....
Liturgy of Light	51.....
教役者会から	57.....
外濠教会グループの取組	58...

主教メッセージ

1995年主イエス変容の日

「平和を願って、これを追い求めよ」（ペトロ。 3:11）

1. 世界平和の実現を目指す教会の使命

20世紀もあと数年で終わろうとしています。20世紀を顧みますと、前半は二つの大戦が起こりました。「戦後」と呼ばれる後半の50年も世界の至る所で局地的な国家間、民族間、宗教間、人種間の抗争が絶えず繰り返され、現在も終わっていません。近年パレスチナや南アフリカなどで、永年にわたる激しい対立が和解に向かうさざしが見え始めたところもあります。しかし、20世紀は絶え間ない戦争と分裂



で平和の見通しが暗い時代だったと言えます。神の平和実現のため熱心な祈りと勇気をもって仕えることこそ21世紀をむかえる私たちの教会のもっとも重要な課題であります。

2. 「主は平和を宣言されます。

...正義は御前を行き

主の進まれる道を備えます（詩85:9および14）

20世紀の日本国は、とくにその前半は帝国主義及び軍国主義国家として平和を擁護するより先それを破壊する勢力に加担していたことは否定出来ません。その意味で私たちは、まず過去において自分たちの教会が国家との関係において行ってきたことを謙遜に、かつ、率直に見直さなければなりません。神の平和の実現の課題に取り組むためには、その前提として神の正義の光のもとで私たちの過去の行為を究明しなければなりません。かつてヨーロッパの帝国主義諸国が同じ過ちを

犯し、教会もそれに妥協していたではないかという前例を引合いに出して、日本とその教会の過ちを免罪にするわけにはいきません。これは日本の教会が主体的に率先して、信仰の良心をもって誠実に実践することなのです。私たちキリスト者がこれを実践するのは、ただ国際的な、とくにアジア諸国からの日本に対する不信感を取り除くためではありません。戦後50年を迎えた私たち日本人キリスト者は今何をするかが神のみ心に沿うことになるかという視点からの実践です。詩85篇で言われているように、神の平和宣言に先立ち平和の主の進まれる道が神の正義によって備えられなければなりません。

3. 戦争の被害者と加害者

6月23日は沖縄の慰霊の日でした。今年は戦後50年ということで日本聖公会は総会決議でこの行事に参加しました。沖縄を訪問するたびに、私はアベルを殺害したカインに神が告げた言葉を思い出します。「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる...」(創世記4:10) 沖縄の戦闘で日米双方の戦死者総数は230,000人余りと言われます。そのうち米軍は14,000人余り、残りはすべて日本側です。その約半数の犠牲者は一般住民でした。それ以外に強制連行されてきたいわゆる当時の『朝鮮人軍夫』や『慰安婦』など1万人あまの犠牲者がいます。戦争でもっとも苦しむ犠牲者は無力な人々です。高齢者、女性、子供の犠牲、また無実な者の犠牲はいつまでも沖縄の土の中からアベルの血のように何かを語りかけます。この叫びは平和が実現するまで神が私たちに語りかけるでしょう。

広島と長崎では、原爆により多くの非戦闘員が犠牲になりました。広島原爆犠牲者慰霊碑は川に囲まれた平和記念公園の中におまます。その島に渡る橋の外側に『韓国人犠牲者記念碑』が建っています。平和公園の慰霊碑すべては何かを叫んでいますが、それ以上に公園の外の記念碑は、韓国・朝鮮人犠牲者の血が土の中からより激しく叫んでいるようです。私たちがアジア諸国を訪問するとき、至る所で日本の侵略で犠牲となった多くのアジア諸国の犠牲者の叫びが聞こえます。世界の平和実現に取り組むためには、日本人だけが原爆や爆撃の被害者であるという観念を乗り越えて、世界中の土の中からの無力な犠牲者の血の叫びに耳を傾けなければなりません。そして戦争の最大の犠牲者は無実な弱者である事実を認識しなければなりません。

4. ベトナム戦没者記念碑:「無意味な死」の意味

アメリカの首都ワシントンは美しい整然とした印象的な都市です。とくに印象的なのは観光名所となっているモ - ルです。そこにはアメリカ合衆国の建国の理想と栄光を記念する雄大な白い大理石の建築物が数多くみられます。有名なリンカーン記念碑のすぐ前に黒い花崗岩で地面を這うようにして造られている「ベトナム戦没者記念碑」があります。ベトナム戦争はアメリカの歴史の挫折の出来事だったといえます。ここで戦った兵士たちは、あるものからは無実の民衆を殺傷した殺人者而非難され、あるものからは共産主義者に敗北した弱兵と軽蔑されました。ある意味ではモ - ルの雰囲気には似合わない記念碑です。しかし不思議に魅力的な場所です。家族や友人がたくさん集まって、刻まれた名前を撫でたり、故人が愛した花や縫いぐるみなどが置いてあります。ここでも土の中からの叫びが聞こえます。

すべての戦争は無意味な人間の行為です。戦争犠牲者は人間的に言えば無意味な死を遂げたのです。日本では15年戦争を侵略戦争と認め、侵略した国々に謝罪しなければならないということに抵抗があります。同胞の戦死者の死がすべて無意味だったことになるからです。しかし、それが無意味な死であったからこそ、土の中からその血が叫ぶのです。私たちはこの叫びに耳を傾けなければなりません。それは和解と平和に関する叫びです。彼らは平和の実現を今生きて21世紀を迎えようとしている私たちすべての人々に向かって叫んでいるのです。「(かれらの) 血が土の中から叫んでいる」と告げられるのは神ご自身なのです。今は無意味な死と思われる彼らの犠牲は、世界平和の実現のための先駆者としての犠牲となるのです。

5. 「主の平和」

ある人は戦争とか闘争は人間もって生まれた本能なので、人間社会から戦争を根絶することは出来ないと主張します。聖書はそのように教えません。戦争は罪で擦じ曲げられた人間の心によって起こされるもので、神が良いものとして創造された本来の人間は平和を求めているのです。旧約聖書の平和(シャロ - ム)は戦争が中止している状態ではなく、神によって造られたすべての被造物が本来のあり方を回復した状態です。人間の本来の心はすべて平和を求めているのです。神から与えられたもっとも貴重な賜物である(生命)のちをお互いに大事にすることが神に姿に似せて造られた人間の本心なのです。罪人としての私たちがいたく

闘争心や憎悪の気持ちを超えて、さらに心の奥底にあるこの平和への共通の願いをお互いに確かめ合わなければなりません。これは本来、神の賜物ですから、祈りにより神の助けなしには出来ないことです。

「罪人の制御出来ない心を治められる方はあなたのほかにありません」

(復活節第6特祷)

今日8月6日は広島原爆記念日であると共に、主イエスの変容の日です。神の平和と和解をこの世に実現するために十字架の苦難の道への出立に当たって、その主イエスこそ神のみ心にかなった愛する子であることを確認するのです。弟子たちは「これはわたしの子。選ばれた者。これに聞け」という神の声を聞きます。私たちもこの声を聞きながら、終戦50周年に原爆投下の記念日に、また20世紀最後の10年の中間の年にあたり、東京教区の諸教会・礼拝堂の兄弟姉妹とともに平和の課題に取り組めるように今日の礼拝で祈りましょう。

「どうか、平和の主ご自身が、いついかなる場合にもあなたがたに平和をお与え下さるように。主があなたがた一同と共におられるように」(テサロニケ「 3:16)



メーランド教区・ティーンズ交流プログラム

事前の平和教育について

メーランド・プロジェクトが主催した『ティーンズ交流プログラム』が、7月29日～8月8日の旅程でメーランド教区において実施され、7教会から15名の青年（2名のスタッフ）が参加した。参加者は、広島原爆投下から50年目の8月6日を現地で迎え、それを覚えるプログラムにも出席することになっていた。そこで参加者には、事前の平和教育を行った。

1 「原爆」について

（7月9日：目白聖公会）

ビデオ学習 スミノニアン博物館原爆展示をめぐる議論（NHKスペシャル）

スミノニアン博物館が、爆撃機 エノラ・ゲイ に併せて、原爆投下の被害の実態を展示しようとしたところ、退役軍人協会などからの反対によって展示が縮小された。これをめぐって、博物館には1万5千通もの手紙が寄せられていた。番組は、その賛否のいくつかを紹介し、手紙を書いた本人にインタビューしている。米国における原爆論争は、国民の戦争理解・歴史認識の大きな溝を明らかにしている。

ビデオを見て、意見交換をした。主な意見を以下に挙げる。

- 原爆投下によって日本は救われたと思う。アメリカの援助もあった。これがソ連だったらと思うとぞっとする。
- アジア侵略をした日本、市民に原爆を落とした米国、どちらも良くない
- 展示縮小は、若い人にとって議論の機会が奪われたことだ。
- 米国人の立場、日本人の立場、それぞれで原爆を考える。自分の立場から考える。それは当然だろう。ただ、日本が戦争を始めた。侵略した。
- どっちが悪いかではなく、人間が人間を殺すこと、今も被害を及ぼしている事実を知り、それをもって今やっていることをやめる必要がある。
- 日常生活をしている人に何の関わりがあったというの?!
- 戦時中の日本はマインドコントロール状態。日米共に思想を植えつけられていた。何が正しいのか? いまだに考え続けなければならない。

- 米国は核兵器を使用したコンプレックスから、こんなことを議論するのか? 日本軍がやったことは人間のやることじゃない!! 原爆によって日本人は人間の心を取り戻したのかもかもしれない。
- 日本でこのような展示はないの? 日本も戦争展は必要。
- 原爆でなくても 戦争を終わらせる方法はあっただろう。
- 殺されていった人、苦しんでいる人からの視点で歴史をとらえ直す、その感性を大切にしたい。
- 犠牲を無にしてはいけない。戦争を賛美してはいけない。
- 人間はなぜ戦うのだろう? なぜ侵略するのだろう?

s日本の戦争の事実を見つめる

(7月23日:神愛教会)

ビデオ学習「 マギー牧師の証言 ~ 南京大虐殺 」

中国と日本をこよなく愛した宣教師ジョン・ガレスピー・マギー(聖公会司祭)が、南京在住の際に目撃した日本軍の蛮行を、つづさに16ミリフィルムに収めた。それは世界中に知れ渡った(日本人だけが知らされないでいた。)ビデオは、マギー牧師のフィルムと、被害を受けた生き証人の証言、また日本の政治家の暴言などで構成し、歴史の事実を明らかにする。

* かなり衝撃的な映像、事実の前には、言葉がなかった。黙想した。

* 陪席した下条裕章司祭(神愛教会)は、池袋聖公会の故八木立三先生より聞いた戦争の話、特に従軍慰安婦のこと、人を殺すということについて、「このことを語り伝えてくれ」という八木先生の遺言として話された。

t日本の戦争における教会の取り組み・課題

(7月24日:神愛教会)

『 平和への決意 』(日本カトリック教会) を読む

日本カトリック司教団が1995年2月に出した、戦後50年にあたっての『 平和への決意 』を輪読した。

聖公会の平和への取り組みについて: 香山洋人執事(聖パトリック教会)

1) 教会が何をしてきたのか

! 湾岸戦争勃発直前の米国の教会

ニューヨーク・聖三一教会の前には、武力介入反対のプラカードを持った市民がデモをしていた。大統領は、その間を通り抜けてミサに出席した。ミサを終えて、ブラウニング主教は聖堂玄関に立ち、牧師として全信徒を送り出した。大統領のことも送り出した。彼もまた信徒であるから。しかしその後、すぐさまブラウニング主教は、一市民として、聖堂前のプラカードのデモ隊に加わり、大統領に「戦争反対」を唱えたのであった。これは米国聖公会の平和への取り組みの現実である。

" 『ANGLICAN WORLD』誌のルワンダ特集から -

ジョージ・ケアリー・カンタベリー大主教はルワンダを訪れ、大虐殺の痕跡を見てまわった。そして、国外に脱出したオーガステイン大主教(ルワンダ聖公会)に向かって、

「あなたは逃げるべきではなかった。大虐殺の責任はあなたにもある。今すぐ国に戻り、虐殺をストップさせよ。そうでなければ主教を辞するべきだ。と忠告した。それが、教会が平和のために働く、という意味である。

2) 聖公会正義と平和ネットワーク APJN から

『Anglican Observe UN』という雑誌がある。聖公会は国連に発言権を持っている。オブザーバーとしての議席がある。

聖公会は、ボスニア、ルワンダ、湾岸戦争の際に、日々平和を求めて頑張っている、その事実を知っておいてほしい。世界平和に関わっている聖公会の仲間として、祈り協力していきたい。

世界は日本をどう見ているか、『聖公会人権声明集』64頁には、「日本 - 日本における軍国化の動きが関心を引く事柄である。この方向への動きはその地域を不安定にする可能性がある。我々は、そのような進



展に反対して働いている日本聖公会及び他のグループを支援する。」とある。このようなことを日本聖公会の我々は、よく考える必要がある。

u 聖餐式(平和への祈り)

最終準備会の最後に、宮崎光司祭(ティーンズ交流チャプレン)司式で、補式を下条司祭、香山執事のギター奏楽、聖書朗読、代祷、サーバーを参加者で分担し聖餐式を捧げた。8月6日用の式文『戦後50年を覚えて - 平和への祈り』を共に用いた。

現地での平和プログラムについて

！ 8月6日：ヒロシマを覚える礼拝

メリーランド教区大聖堂(ボルチモア)では、8月6日(日)に「ヒロシマ原爆投下50年を覚え、和解を祈る聖餐式」を午前10時30分より行った。司式：チャールズ・ロンゲスト補佐主教、説教：エドワード・ハイム牧師(ルーテル教会・正義と平和委員会)、東京大空襲、広島・長崎原爆投下の被害を覚えながら、核の脅威と核兵器廃絶、そして平和への願いを語った。礼拝後のレセプションでは、参加者の鈴木緑さん(浅草聖ヨハネ)、小谷尚子さん(聖十字)、宮崎光司祭が、それぞれの親たちの戦争体験を語った。また、アナポリス聖マーガレット教会では、牧師のメアリー・グラスプール司祭が、広島への原爆投下の罪を懺悔する説教をした。

"原爆展見学

参加者は、ワシントン観光において、スミノニアン航空宇宙博物館の『エノラゲイ特別展示』を見学した。原爆展論争を学んだ参加者たちは、広島や長崎の原爆を落とされた側の視点の欠如、爆撃機エノラゲイの勇姿を賛美するような展示に、それぞれ複雑な思いを感じた。

戦後五〇年証言集

私は平和が欲しい!!

私は平和が欲しい!!

開け放たれた窓から射し込む光の平和、

サイレンの音におびえることなく。

穀物、くだもの、野菜、花々の平和、

それらの色をうしなうことなく。

草や熟したトウモロコシの平和、

未来のこどもたちがパンに困ることなく。

砂の上を乗り越えていく波の平和、

人魚を追いかける潜水艦のない海で。

紺碧の空を流れる星の平和、

天に昇った人々が狂気の人間に脅かされることなく。

核爆弾を造る工場のない平和、

影を映し出す死の機械のなく。

私は平和が欲しい!!

"Liturgical Sources" 1990 U.C.C.P. (フィリピン合同教会)より

日記抄

池袋聖公会 浅井慎吾

七月二八日(土)一八時三十分出帆夕日にもえる緑の山々を後に刻々内地を離れる。出帆後四十分にして触雷、船腹に穴あき浸水甚だしく刻々沈下す。ただちに準備せんとせしも混乱甚だしく容易にできず、平素周到なる用意の肝要なるを痛感す」

これは昭和二十年(一九四五年)の七月二八日の私の日記の一節です。陸軍航空士官学校に在籍していた私は、戦闘機操縦訓練のため満州(現在の中国東北部)に向かうべく舞鶴港を出港しこの事故に遭いました。触雷とは米軍が日本海沿岸に投下した機械水雷に触れたことです。一刻を争って海中にとびこみ、退避しましたが、頭上から米軍機の機銃掃射を受け、その弾丸がビシッビシッと海面に刺さりまさに生きた心地がしませんでした。そして数メートル先を泳いでいた同期生が太ももを撃ちぬかれ、舞鶴の海を血に染めながら沈んでゆきました。

八月十五日(水)午前一二時兵舎前に整列、畏くも大詔を拝す。神国日本は敗れた。然り而して決して滅びたるに非ず。……」

これが私の戦争体験であり終戦の日の所感であります。当時満十八歳そこそこの一青年の日記ですから現代の同世代の青年には理解が困難かと思いますが、敢て原文のまま記しました。

戦争は国家権力の激突であり人の殺し合い、物の壊し合いありより多くの人を殺したものが勇士として讃えられたのです。つまり狂気でなければ到底できないことです。満州事変から十五年間この狂乱の時代が続き、その中で捕虜虐殺や婦女暴行がくりかえされました。「戦争とはそういうものだ。いつの時代の戦争でも捕虜の虐殺や婦女暴行はあったのだ」という人もありますし、そういう事実もあったようです。しかし、抵抗する術もない弱者を殺したり辱めたことについては、深く自省しきちんと謝罪すべきであります。

二十年ほど前の池袋聖公会で行われた「敗戦記念平和祈禱会」で、八木立三

先生(執事)が上官の命令とはいえ、私は捕虜殺害の現場に立合っていました。その時の痛み、悲しみは生涯私の胸から去らないでしょうと涙ながらに話されました。人を殺すというと、人に殺されるということとは、どれほど恐ろしく、怖く、つらく、悲しいことであましょか。それが平然と行われるのが戦争なのであます。



平和

平和は銀のお盆に載せて差し出されることはない。
苦闘の中で、いつもその価を払ってきた。

血の代価を！ 汗の代価を！ 涙の代価を！
値が高すぎる、と私たちは言う。

しかし、私たちは平和という目的に向かって進む。

公正、正義、愛という

神によって与えられた共同体を共に創造するために、

私たちは呼ばれた。

船が海路をとるように、私たちは平和へと進む。

飢えた人と渴いた人こそが産み出し、

歩けない人と目の見えない人こそが人々に力を与え、

捕われ人が他の人々を解放し、

うちくだかれた人こそが全体を創造する、

そのような海路を取りつつ、私たちは平和へと進む。

シャローム！

ルーディー・ベイリー司祭による詩から

お前たちはエリートだ

聖パトリック教会 久保田 正光



今から五〇年前、私は戦時体制下での中学生生活を送っていました。軍国主義教育の下では「一日も早くりっぱな軍人になって国のためにつくす」という教育が徹底して行われ、若い私たちはそれに対していささかの疑念もさし挟みませんでした。私は海軍兵学校を受験し、一九四五年4月から敗戦まで兵学校で生活しました。

兵学校入学前の一年間の中学生生活は勤労働員で、毎日工場に通って工員と同じ仕事をし、月に二回だけ学校に行き、午前中授業、午後は軍事教練という状態でした。

ところが兵学校では、授業はピッシリ六時間あり、放課後は分隊ごとに各種のスポーツを楽しみました。食事なども豪華で天皇誕生日や海軍記念日などには大きなビフテキまで出るほどでした。

兵学校の分隊付きの教官から常に言われたことは、「お前たちはエリートなのだ。一日も早く優秀な海軍の指導者になって国を守れ」ということでした。

戦争が終わって思い知らされたことは、兵学校の、当時としてはぜいたくな待遇は、一般国民の犠牲の上に成り立っていたということです。東京に住んでいた私の家族はごくわずかな配給の食料で飢えに耐えていたのです。



端的な例を挙げれば、東京の人は軍から命ぜられて、いざ空襲の時に逃げ込む防空壕をつくっていました。しかし四五年3月の東京の下町大空襲の翌日、私が深川に行ったとき、道端の防空壕の中に真っ黒に焼けただれた死骸を見ました。逃げ込んだ人は無残にも焼死したのです。兵学校の校庭にも防空壕がありました。

何と厚さが一メートル以上もあるコンクリートに覆われ、入口もカーブして爆風が防げるようになっていました。当時の軍の上層部はこういう防空壕でなくては安全は保たれないことを知っていたのではないのでしょうか。それなのに、一般国民にはチャチな防空壕作りを命令していたのです。

「お前たちはエリートだという考え方は日本人はエリートだということにつながっていたと思います。当時、大東亜共栄圏建設と言うことが戦争の目的として掲げられていましたが、「神国日本 = 優秀な日本人が、劣ったアジア人を助けてやるのだ」という思い上がりがあったことは否めません。

現在、日本がアジアの人々に対して、戦争中の過った行為を謝罪することに及び腰なのは、経済面でアジア諸国にまさっている日本人が、いまだに誤ったエリート意識を持っているからではないでしょうか。

私は数年前、神崎司祭に同行してフィリピンのパナイ島の山村の教会を訪問しました。神崎司祭は挨拶の冒頭で戦時中の日本軍が行った数々の暴行について謝罪しました。その後一人の老人が私に「俺は日本の兵士が赤ん坊を空に投げ上げ銃剣で突き刺したのを見た」と言いました。思わず息をつまらせた私に「でも、あなたたちとは今後は仲良くしよう」と続けました。

戦後五十年の節目を迎え、過去の過ちを率直に謝罪してこそ、新しい友好関係が築けるものと痛感しています。



主の平和

三光教会 姉川 良一

第一回学徒動員で卒業を五ヵ月早められ、昭和十七年二月陸軍に入隊した。幼児洗礼でキリスト者の家庭に育ち主日の礼拝を教会で守りながら、真珠湾攻撃の直後には、ある程度の興奮を覚え、戦争否定はおろか日本国民として戦わねばならぬという気持であったことは率直な事実である。

入隊後、幹部候補生となり、予備士官学校で陸士出の区隊長から「大忠帰一」の訓話でマインドコントロールされ、重機関銃小隊長として南方戦線に船出するときには「勝たねば帰るまじ」と誓っていた。南方の島で戦い、その間多くの部下や戦友を亡くした。

終戦となり、一年間シンガポール南マラッカ海峡にあるレンバン島で捕虜生活、昭和二十一年六月宇品港へ帰国復員。被爆地広島を通るときは汽車の窓のブラインドを下ろされた。放射能を警戒したのか、惨めな故国の姿から目を覆うためか、戦いの惨めさを祖国でまで痛感した。昭和二十八年商社マンとして、まだプロペラ機であったが、アメリカへ出張したとき、サンフランシスコの街角でお婆さんから「お前は日本人か」と声をかけられ、「私はこの戦争で日本人に息子を殺された」と叫ぶように言われた。その時私は、アメリカのアミックボンブで多くの一般人が殺された……と言い返したかったが、これを押えて戦争は二度とあってはいけない。世界が平和であるようにと答えたのを覚えている。

なぜ人間は戦争をするのか。「汝の敵を愛せよ」といわれ人類を創られた神のみ心に反して、紀元前も紀元後もなぜ戦争は絶えないのか。戦争の起りは、民族・思想・主義・宗教の相違、国益の衝突、国力の強弱、領土の拡大、資源の獲得などなど、同じ人間であつながら色々な人欲と怨念がからんだ醜い闘争である。人間同士の愛はどこにも見出せない。戦争に踏切るのはその時の為政者である。その国の



リ-ダ-がゴ-サインを出したとき、国民は好むと好まざるとに拘らず、フォロ-せねばならぬ宿命を持っている。

サミットの長上会議が永年続けられているが、平和憲法という素晴らしい国是に生きている戦後の日本のリ-ダ-は、なぜ 武装放棄、戦争皆無の世界平和 を絶叫しないのか。これが原爆の被害を受けた唯一の国、日本の特権であるし、わが国は世界平和を呼び得るヒロインではないのか。

人類を創られた全能の主は、ひとり子をこの世に遣わし十字架の血により全人類の罪を担い、愛に徹し、人類の救いの内に復活された。然し次の裁きの日まで厳格な審判の目で私たちを見ておられる。イエスは十字架の死によって全てを代表し、人間が命を奪いあうことを否定された。人の命に対する権能はただ神のみにある。

私たち個人個人は弱い存在である。とても個人的に世界に呼びかける力も能力もない。しかし私たちは、主日の礼拝で 互いに尊敬する心を与え、全ての人の幸せを求めさせて下さいと祈っている。聖餐の初めには、隣の人びと 主の平和 と平和の挨拶を交わしている。この小さな挨拶が単に教会の隣の人との祈りにとどまらず、全世界の人々との挨拶にまでエスカレ-トし、戦争の永久に無くなることを望んでやまない。

祈り

真理とよばきの主なる聖霊よ

わたしたちのこの世界をにぎっている

数々の力を追いはらうことのできる方は

あなたをおいて他にありません

この危機の時代にあつて

あなたの決断を私たちにお与えください

何が悪であるのかを正しく見定め

それが悪だと言えるように

そして平和へとつながる道を

私たちが知ることができるよう

あなたの決断をお与えください

イエス・キリストを通して

お願いいたします

アーメン

東京大空襲

東京聖三一教会 寺内 安彦

ゴオーという列車が鉄橋を渡る時の様な音が止んだ。数秒後ドカーンと炸裂音がする。遠くからカン、カンと金属を地面に叩きつける音が近くに迫ってくる。突然、防空壕の中が明るくなった。急いで外に飛び出ると石油の臭いと一緒に辺り一面火の球が無数に吸い付いてくる。焼夷弾だ。巨大な渡り鳥の様に無数のB29が低空で空を覆っていた。

夜が明けた。何も残っていない。いや、あった。死体だ。無数にあった。手足が硬直した茶色の人形のような死体、頭を用水桶に突っ込んだまま死んでいるもの、様々な死に方だ。言問橋は死体がじゃまして渡れない。防水用のプール脇で母親が泣きながら浮かんでいる女の子の死体を鳶口で引き寄せていた。やがて、兵隊が来て死体の片付けが始まりあちこちで死体の山が出来上がった。それから三日間、死体を焼く死臭を嗅ぐ毎日を過ごし浅草を離れた。一九四五年三月十日の空襲で東京の下町浅草で生き残った私は中学二年生だった。それ以来あの死臭は私の記憶から離れないままだ。

三月十日の空襲で一体何人死んだんだ、十万人か、二十万人か、みな年寄りと女子供だ。火叩き、鳶口、バケツルー、何の役にも立たなかった。消防車は車庫で焼けていた。無差別爆撃による焦土戦術、大量殺戮、これが戦争の実態だ。日本で、中国で、東南アジアの国々で同じことが起きた。五十年前の出来事であり今も多くの日本人の記憶の中に、被害者として、また加害者として生きている事実だ。

一体どうしたら若い人たち、後世の人々に戦争とは悲惨な醜い最悪の営みだということが解って貰えるだろうか。戦争こそが人間が神さまから最も離れていると

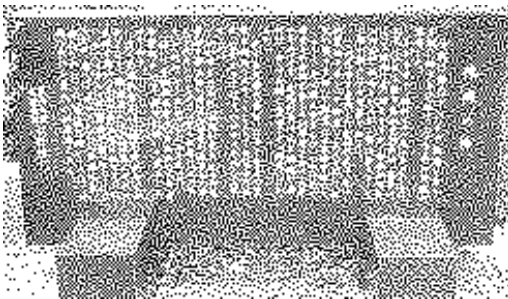


きの状態だということ。キリスト教徒といえども他の宗
徒と共に幾度となく戦争を繰り返してきたし、また繰り返
すかもしれない。そんな人間を主イエスは本当にお赦
しになるだろうか。今日の平和は神の賜物なのか、ある
いは人間の闘争心、征服欲が一服した状態なのか、強
者による力の威圧が効果を顕わしている束の間なの
か。戦後五十年たってみると、戦争の罪悪性、すなわち
神への反逆性がどれほど確認されてきただろうか。記
念集会も、反戦集会も、隣の乱暴ものがちん入してこ
ない間の祭で終わりはしないだろうか。戦争の本当の意
味がそれを体験した人の死により風化されるのは避け



られないことだろう。そうならない様にと今でも慰霊塔を建てる話が出て来るが、
石塔を建てたところで後世の人々に戦争の地獄絵が解るはずはない。沖縄の糸満
市にある都道府県の慰霊塔を訪ねたとき、私は沖縄戦の悲惨な姿を思い浮べるよ
うに各県が互いに碑や塔の出来栄を競いあっているコンクールでもあるかの様
に思った。

慰霊塔は時代と共に歴史年譜の中で乾燥した一コマの記述と同じ意味しか持
たなくなる。もし無理に意味を持たせようとすると、戦争という人間の罪の行いが、英
雄とその救国の行いへと、愛国心という甘いことばの梯子で持ち上げられてしま
うだろう。ならば少なくとも石塔を建てるのを止めて、広島原爆記念館やワシントン
DCにあるホロコースト博物館の様に事実を示す記念館を後世に残しておくこと
の方がより望まれる。



原子雲

目白聖公会 竹内 崇

原子爆弾といえまず思い浮べるのがキノコ型をした雲の写真ではないだろうか。あの日あの雲の下で何が起っていたのだろうか。原子爆弾で被害を受けた人々を法律では次のように扱っている。第一号 = 原爆投下の時広島市と長崎市の旧市内に居た人、第二号 = 原爆投下の日から二週間以内に爆心地から二キロ以内の地域に入った人、第三号 = 市外に居て救援や死体処理にあたった人、黒い雨の地域に居た人の一部、第四号 = 一～三の被爆者の母親の胎内に居た人。

これは原子爆弾の放射能が人体に与える被害がいかに大きいかを示している。現在東京都では約一万人が被爆者手帳の交付を受け、その内約六四%が何らかの障害で病気と診断され治療を受けている。

原爆投下の日、熱線による焼死、建物などの崩壊による下敷による圧死、火災による焼死に始まり 今日まで多量に浴びた放射能による障害で次々と死んでいった被爆者、そして五十年経った現在でも被爆の後遺症により病気と戦っている人がまだ大勢いる。戦争は自分が死んだときか核兵器が世界から無くなったときに終わるといった被爆者がいる。その方や私にば 昭和二十年八月六日午前八時十五分、一生忘れる事の出来ない出来事が起ったのである。人々はそれぞれ職場、勤労奉仕先や家庭で何の警戒もなく暑い一日の生活を始めたばかりだった。

窓から北西の空にキラッと光るB29の姿が見えた数秒後、一瞬パツと光ったかと思うとすごい爆風に体が飛ばされ、辺りは何も見えなく、誰かに防空壕に引きずり込まれた。辺りが明るくなり外に出ると家がない。家の形をした柱と梁が傾いて立っている。何が起ったのか市の中心部の方から煙が上がっている。私の名前を呼ぶ母の声が聞えた。さっきまですぐ側にいた母が遙か遠くから大声で叫んでいる。「おかあちゃん」といって母の胸に飛び込んで行く。涙が出て止らない。その涙が頬をつたったとき肌に痛みを感じた。右手で触ってみると皮膚が動いた。そして左手にも同じ感覚があった。何か濡れた布を皮膚からはがしているようだった。やけどだ。しかし薬はない。誰かが小便だといって小便で傷口を洗った。幸い軽度のやけどだったのでケロイドにはならなかった。廻りの人々に怪我ややけどはあったが即死とか下敷になった人はいなかった。やや落ち着いてからも何があったのか解ら

ない。空襲には違いないが呉市に落されたものとは違うことは確かだった。投下後何十分か経った頃、市の中心部から逃げてくる人が目に入った。どの人もみな黒っぽい姿だった。それは血の付いた衣服であった。焼けただれた裸同然の姿であった。顔はふくれあがり、女の人は髪が顔に付いている。昼間からお化けか幽霊を見る思いだった。そして口々に「水、水を下さい」と苦しそうに訴えている。私は、この人たちは一体どうしたのか、何があったのか理解することは出来ず、ただ気味が悪いし恐ろしいという気持ちで一杯だった。そしてこの行列はとぎれることはなかった。その夜満天に星が光り西の空は赤く染っていた。そこは一瞬にして焦土と化した数万户の家が消化されることもなく燃え続けているのであった。

当時私は国民学校一年生で原爆の本当の悲惨さは体験していない。あの日から五十年を迎え、戦争を知らない世代が多くなり、貴重な平和が空気の様にあたりまえの様に思われる時代になってしまった。しかし、世界中の核兵器は、依然として「平和を支える」という名の下に残念ながら保持され続けている。同じ被爆者が被爆体験記を作った。私たちの訴えをどうぞお読みいただきたい。

* 被爆体験記『原子雲第二集』(足立区原爆被爆者の会)

<ヒロシマ>というとき

<ヒロシマ>というとき

<ああヒロシマ>と

やさしく答えてくれるだろうか

<ヒロシマ>といえば

<パール・ハーバー>

<ヒロシマ>といえば<南京虐殺>

<ヒロシマ>といえば女や子供を

壕の中身とじこめ

ガソリンをかけて焼いたマニラの火刑

<ヒロシマ>といえば

血の炎のこだまが 返ってくるのだ

<ヒロシマ>といえば

<ああ ヒロシマ>と

やさしくは返ってこない

アジアの国々の死者たちや無告の民が

いっせいに犯されたものの怒りを

噴き出すのだ

<ヒロシマ>といえば

<ああ ヒロシマ>と

やさしく返ってくるためには

捨てた筈の武器を ほんとうに

捨てねばならない

異国の基地を撤去せねばならない

その日までヒロシマは

残酷と不信のいがい都市だ

私たちは潜在する

放射能に灼れるバリアだ

<ヒロシマ>といえば

<ああヒロシマ>と

やさしい答が返ってくるためには

わたしたちは

わたしたちの汚れた手を

きよめねばならない

栗原 貞子

平和への祈り

練馬聖ガブリエル教会 鈴木玖磨子

その頃私たちは満州国奉天市におりました。度々出る号外で南方での玉砕を知り、皆々心を暗しました。私たちは空襲警報に備えて、夜も昼も同じ服装で運動靴はいたまま、ただ横になるだけでした。朝、目がさめたら第一に御飯を炊き、炊けたらおにぎりをつくります。いつ空襲警報があつて防空壕に駆け込まなくてはならないか分からないからです。そして解除を大声で告げて歩警防団員の声が聞えるまで、暗い防空壕の中でじっとしていなければなりません。当時二歳半の三女が号の暑さを嫌がって出る、出るといって困らせたことを覚えています。

その中、医大の家族は疎開することになり、夜の十一時頃医大の家族は奉天駅から、平常は牛や馬の輸送に使う無蓋車に乗って奉天駅を離れました。主人たちは大学に残っていつ襲ってくるか分からないソ連軍の備えとして大学に残ったのでした。夜半の無蓋車は黙々として発車しました。

翌朝早く沿線の小さな駅に着きました。そこは葉タバコをつくる工場で広い板の間があり、私たちはそれぞれ家族で座りました。多少顔見知りの人もありホッと致しました。翌日引率の三人の先生方がしきりに何か話しておられ、その中が今日は重大ニュースがあるから講堂に集まるようにと言われました。私たちは何かしらと訊しみながら講堂

私はその一部を

差し出したに過ぎません、

あまり深入りしたくなかったので

主よ、あなたに仕える私の

この計算されたやり方をお許しください

い

都合の良い時だけの

安全な場所でのだけの

一緒に働きやすい人々とのだけの

こんな私のやり方をお許し下さい

主よ、私をお許しください

そして役に立つ器として、私を送りだして

ください

あなたの十字架の意味を

真剣に捕らえることができるように

ジョ・セレーヌ、南アフリカ

(Bread of Tomorrow)

に集まりました。その時天皇陛下の玉音で戦争が終わったこと、戦争に負けたことなど悲痛なお声で聞かされました。居並ぶ私たちは悲しいような安心の様な複雑な思いで、みな声をあげて泣きました。もう戦争が終わった以上疎開の必要も無いので、再び奉天に戻るようになりました。

ところが奉天駅に着くと今までとまるで街の様子が変わっているのです。静かで美しかった奉天の街は暴動化していて大きな会社や富める人の家に暴徒が押しかけている色々な品物を持ち去りある印刷工場を暴徒が襲った時など白い紙が風に吹かれて空高く舞い上がったり、本当に恐ろしい思いを致しました。中国人の学生たちの希望で医大の先生たちは残らねばならず、家族たちだけ引き上げ船で口島から上陸用舟艇に乗って博多に周りそこから引き上げ列車といひ引揚者のための列車に乗って、各自自分の里の近くの駅で下車を許され、私たちは主人の長兄の居る横浜駅で下車いたしました。

横浜も空襲で焼け野原と化しており私たちは途方に縲れました。知らない人に平沼町のあたを教えていただいでようやくたどり着きました。

戦争は絶対してはならないと思います。



あなたの目的のために

あなたの目的のために使われようとする

あなたは私の手を求められました

私はちよとだけ手を出して

すぐ引込めてしまいました

仕事がつきつかったので

不正に向かって声を上げるように

あなたは私の口を求められました

私は小さく囁いただけでした

自分が責められないように

貧困の痛みを見るように

あなたは私の目を求められました

私は目を閉じてしまいました

見なくなかったので

あなたは私を通して働けるように

私の命を求められました

戦時教育の体験を通して

練馬聖ガブリエル教会 岩井 梅代

戦後五十年はマスコミに、あらゆる角度からその傷跡を問題にさせています。見えなくされて、突っ走らざるをえなくしてきたものは何だったのでしょ
うか。立教女学院百年史資料集の戦争時代の章を参照しますと、昭和六年満州事変、十二年日華事変を経て、十六年太平洋戦争に突入、二十年の敗戦に至るまでのほぼ十五年間は戦いの明け暮れであって、この間の教育、「つま」戦争時代の教育の特色を一口で言えば、皇国民の錬成ということに尽きるとおぼます。その通りであったと共感される皇国民の錬成教育をこの身に受け、教師としてそれを生徒に課したわたしでもおぼます。

牧師の家に生まれ育ったわたしの公教育の始まりは、祈りで始まり祈りで終わる平安女学院付属幼稚園の三年間でした。尋常小学校の六年間は、主なる神と日本の風土の神々との相剋に悩み始めた時と言えるでしょう。教室に備った図書は民族的伝承 - 記紀にある国産み神話、建国伝説、皇国の祖神たる天照大神物語などでした。満州進軍に伴ない国家主義は急速に強まり、天皇崇拜、神社参拝は国民の義務と見做され、修身、歴史(後に国史と改編)の授業の後は男子生徒に取り巻かれて「お前、西洋の神さん拝んでるんやろ、わいらは日本の神さんじゃ」と詰められるのでした。父によれば「神」という語をキリスト教も使うので紛らわしくなって残念なことなのだが、日本の神は人々の祖先であって、神社参拝は祖先崇拜の表れ、なのでした。理解はできても、楽しいはずの修学旅行までも行き先が伊勢神宮では、やはり「わだかまり」が消えないのでした。高等女学校に進学後間もなく満州事変の勃発、登校下校時の奉安庫「ご真影」- 天皇の写真 - の保管場所、礼拝、儀式や祝祭日は前日の予行演習時も含めて、教育勅語の奉読を頭を下げ、聞くこと、祭日前後の全校生徒による桃山御陵、檀原神宮参拝、「習い性となる」教育が皇国民の錬成に役立てられていたこととは否



めない状況でした。さらに明治天皇「御下賜」の教育勅語に至っては、日本の教育の根幹を成すものといわれてきましたが、「我が臣民よく忠によく孝に、億兆心を一つにして、世にその美を濟せるは、これ我が国体の精華にして、教育の淵源また実にここに存す」であり、個人の思考と判断の自由など入る余地も無いことなのでした。

やがて戻った平安女学院専攻部の三年間に、再び信仰の自由、解放された自己を取り戻しましたが、その間にも日独伊の防共協定が結ばれ、戦域は中国本土に拡大。しかし、いまだ女性宣教師の英語授業を楽しみに、GFS活動ではその指導の下に、アジア諸国の女性と平和を共に求める創作劇を実演したものでした。卒業間際に、一男性教授から「国体の本義なる書物の購読を薦められた時、もう一つの現実の存在を学内にはっきりと感じ取っていました。

太平洋戦争下、英語課教師として戻った平安女学院は、英語の授業も程なく打ち切られ、学徒勤労動員の発令と共に、三・四・五年の生徒たちもとも、学内学外の軍需工場の勤労に、巻き込まれていきました。私学にも奉安庫、神棚の設置まで強要され、報道の厳しい管制下、食料不足に耐えて工場通いに年も明け、やがて天皇による判断とされる敗戦の詔勅を聞くことになったのです。マインド・コントロール化した教育の成果は、学徒動員に、特攻隊に、アジア諸国の戦禍拡大に、一役も二役も買っていたのではないのでしょうか。キリスト者であり、教育者でもあった者として、また、一度も空襲されなかった京都に在住していた者として、今も日本の教育の目的、あり方を痛みをもって見守りたいと願うばかりです。



東京大空襲体験記

浅草聖ヨハネ教会 森 美和子

その時、私は深川区猿江町に長兄と姉と弟と4人で住んでおりました。昭和年3月9日は午後からすごい北風が吹き荒れておりました。夜十時半頃警戒警報が鳴り、飛び起きてラジオをつけると、敵の大編隊が房総沖を来襲中とのことでした。そこで皆で防空壕に入っていたのですが、夜中の零時を回っていたでしょうか、消防団の人が「焼夷弾だ、防空壕から出る。」と叫ぶのを聞きました。

表に出てみると西の方角が視野いっぱい一八〇度の方角で燃え上がり、空からは焼夷弾が雨霞と落ちてきていました。。大人たちは、「高橋より遠いから水天宮の辺りかな」とはなしていましたが、誰からとなく、「危ないぞ、逃げろ」という声でざわめいたと思う間もなく、私と弟が二人きり取り残されてしまいました。

家は表通りから少し入ったところにあったのですが、私は小さな柳行李を持ち、弟はポストバッグを持って表通りに出ますと、路地という路地から、何処にこんなに人がいたのかと思うほど、どんどん人が出てきて、猿江恩賜公園の方へ向かっています。人の流れのように電車通りに出て、右に曲がり、小名木川橋に向かいました。横を通る大八車に荷物を乗せてもらい、後から押して橋の途中まで行きましたが、火の粉と風がもの凄く、大八車に火がついてしまいました。柳行李を車から降ろした途端、紐が解けて蓋が開き、その途端に中の衣類が風に舞って全部飛ん

でいてしまいました。進むか退くかためらいましたが、結局戻ることになりました。風がすごいので立って歩くことも出来ず、這うようにして橋のたもとにあった交番にたどり着きました。周りは強制取り壊して原っぱになっており、コンクリートの交番だけが建っていました。川を見ると、五人乗り一〇人乗りの小舟が後から後から燃えながら漂流していました。交番の戸を叩いて入れてもらおうとしてもなかなか戸を開けてもらえ



せん、子供二人で荷物を持っていないからと訴えて、やっと中に入れてもらいました。一五、六人の人が満員電車に乗るように入っていました。そこで夜を明かしたのです。その間ひびきなしにドラム缶が何かの爆発音を聞きました。小さい窓から外を見ると、錦糸町、深川八幡、木場の方が盛んに燃えていました。夜が明けて外に出ると、辺りはもう全部焼け落ちていました。五〇ぐらいの女の人が火膨れになって顔面蒼白、虫の息で交番に寄りかかっていた。錦糸町行きの市電の線路には七歳ぐらいの女の子がうつぶせになって死んでいました。どこも焼けていなかった。煙りによる窒息死だったので、兄や姉を探して住吉町まで行きましたが、丸焦げ、半焦げの死体が仰向けになったり手を伸ばしたり様々の体位で重なって道をふさいでいました。死体を跨いで行くのですが、電線の焼けた臭いや死体の脂の焼けた臭いに混じって、今思い出してもぞとするような嫌な臭いでした。兄達に会えないので住吉町から家に戻りましたが、その途中にも数限りない死体を見ました。近くの警察署もすっかり燃えていましたが、貯蔵していた豆炭に火がついていて一時そこで暖をとりました。その警察の拘置所には囚人が鉄格子にしがみついて死んでいました。家に帰ったら、残り火はあるものの、焼け野原で何もなく、水道の水だけが噴き出していました。近所の防空壕では一人の女性が金庫を抱えて階段に足を掛けたままの状態に焼け死んでいました。しばらく待つうちに兄と姉に再会し板橋の叔母の家をめざすことにしました。

弟は火災によって目をやられていたので、近所で焼け残っていた乳母車に乗せて行きました。小石川辺りからは焼けていず、電車を待つ人などが、私達を見てかわいそうにかわいそうと声を掛けてくれました。板橋に着いて櫛を借りて頭をとかわいそうとしても焼け縮れて櫛が通じませんでした。叔父が行方不明なので、明る日かその次ぎの日だだと思いますが探しに行きました。言問橋辺りから隅田川の河原に降りていったら数百の死体が、並べられていましたが叔父はいませんでした。丸焦げ死体は軍が出動してトラックで運んでいったので、おそらくその中に含まれていたのだと思います。

以上が、3月10日未明の10万人の死者をだしたB29による下町絨毯爆撃の被災体験記です。

戦時中動物も犠牲になった

池袋聖公会 井上こみち

中澤静江さん(六二歳、練馬区在住)が戦時中に愛犬を次々と奪われた体験です。昭和十八年秋、全国の動物園の猛獣が空襲などで暴れるのを恐れ、殺された直後の事。供出という名目で、一般家庭の飼い犬も殺されたのです。〈犬も〉いっぱいお国の役に立ちます。進んで納めましょうと隣組みの回覧板で呼びかけられました。指定の日時に飼い主が連れて来いといふのです。中澤さんがこの命令を知ったのは十一歳でした。中澤家には、〈東亜〉という名の柴犬がいました。二頭のシャエパ-ドもいましたが、前年の冬に軍用犬として戦地に出征させました。中澤さんが一つ蒲団で寝るくらい仲の良い犬でした。「お国のために、犬が出征することは名誉なことと近所の人は、たすきをかけた二頭を、日の丸の小旗で見送ってくれたのです。寂しそうな中澤さんをみかねた父親が、戦争に行かなくていい柴犬を飼ってくれました。それが〈東亜〉です。その頃は食料難でしたから犬を飼える余裕のある家は少なかったのですが、中澤さんの家族は自分たちの分を削ってでも犬に食べさせる犬好きだったのです。かわいい犬の供出を逃れようと、遠くまで連れて行った人もいましたが、中澤さんの父親は命令を守り、指定の警察署に、彼女を一人で行かせたのです。

「愛するものを容赦なく奪うのが戦争だ、自分の目で〈東亜〉の運命を確かめてきなさい。」供出の朝、〈東亜〉にはなげ無しの米で炊いた赤飯に、味噌汁をかけてやりおなかいっぱい食べさせてやりました。最後の食事でした。警察署の中庭に集められた犬たちは、自分たちの運命を分かっているのか、鳴き声ひとつ上げません。〈東亜〉も同じでした。

犬をどうするのか教えてと問い詰める中澤さんに、警官は黙って〈東亜〉の首輪を渡したのです。犬は殺され、毛皮や缶詰にくになり戦地に送られるのだと、巷ではささやかれてい



ました。一人っ子の中澤さんには、兄弟の様なかけがえのない三頭でした。

私はこの話をぜひ多くの人に知ってほしいと思い、中澤さんをモデルにした物語『犬の消えた日』(金の星社刊)を書きました。本の中には、終戦直後まで都内の派出所で警官をしていたさんの、犬の殺戮に立合った証言も書きました。さんもまた犬好きで、「立場上、供出命令を先に知り自分の犬は知人の家に隠しました。その事が分れば警察を辞めさせられたでしょう。非国民と非難もされたでしょう」と声をつまらせたさんもまた、戦争の犠牲者です。

本が出るたくさんの感想が寄せられましたが、なかでも六十代の男性の子供のころ、田舎の山で見た犬の死体の謎が解けた。殺したものの、皮や肉をとる技がなかったのか。まさに犬死にではないか」には、身震いする思いでした。身近な動物の命を通じて、戦争の愚かさをいくらでも語ることができ、ほっとしました。十年前の取材時の事を思い出すと今でもつらくないです。

私が子供だった頃 信徒の証言

東京諸聖徒教会 山浦 美彌子

1931年8月21日。私はこの世に生を受けました。その何カ月もたたない時、満州事変が起き、五歳の時、昭和12年7月、支那事変が始まった。また昭和16年12月8日の真珠湾攻撃です。不幸の始まりとなった。私は五五年間、胸に秘めていた事があり、今語っておかないと私の思いを私だけで終わらせたくないで記します。

私が九歳の時です。第二次世界大戦が始まる一年前から戦争が始まるかも知れないことを知っていました。幼い私が何故...。それは昭和一五年一〇月初旬、宣教師の先生方が母国に帰国なさるのでお別れに行きました。その時、父に「Tさん、アメリカやイギリスと日本は戦争をすと思いませんか。」父は「神様の御心のままに」と言いました。その時、「それは神様の御心ではおません。人間の成せる業です」と仰り、不幸にして戦争が始まっても、私はあなた達御家族のために祈って居ますよと言ってお別れしました。それから一年後、戦争となったのです。



昭和二〇年七月二一日午前2時頃、のどかな田園都市の大垣に

もB29の焼夷弾攻撃を受け町の中は火の海になりました。父は母に「二人の子供を連れて逃げなさい」と言い、私には「君は長女だからお父さんとこの家を守ろうね」と言いましたが、焼夷弾で真っ赤に染まった空とB29の爆音に私は恐ろしくて父の言葉を拒み、母と一緒に逃げました。行くところ行くところ焼夷弾が落ち、いつ死ぬかも知れない恐ろしさは今も忘れられません。学校では「鬼畜米英をやっつけろ」と教えられましたが、空襲の恐ろしさの中でも、宣教師の先生のお別れの時の言葉を思い出し、焼夷弾が落ちてくるのが怖いだけで米英人を鬼畜とは思いませんでした。

こうして戦争を体験してきましたが、死ぬときこそは平和な地球で良かったと神様のみもとに行きたいと思います。世界の皆様、私共は地球の家族です。丸い地球を三角にしないでください。お互いに助け合い、励まし合いあおうではおませんか！地には平和。

私の戦争体験

司祭 塚田 理

一九四三年私たち中学二年生は、夏休み頃から勤労動員ということで勉強は一切放棄して、黒井 直江津の北、現在の上越市の海岸にあった信越科学株式会社の工場で働くことになった。この工場はカ- バイトの製造工場で、原料はせっかいと石炭でこれらを一緒に電気炉で溶かすとカ- バイトが出来上がるという単純なもの（少なくとも私たちにはそんなふうに思われた）であった。最初の仕事はトロッコに石炭を入れて電気炉の近くまで運ぶという単純な肉体労働であった。しかし、夏は暑さで、冬はしばしば吹雪の中で、野ざらしのせ石炭をスコップでトロッコの中に投げ入れ、それを押して行くという仕事は十四歳の少年たちにはなかなかきつかった。この仕事でスコップの扱い方がずいぶん上手になった。

やがて、周囲の青年たちが次々と軍隊への召集令状を受け取った。その度に一緒に働いていた私たちの彼らの送別会に招かれて「勝ってくるぞと勇ましく、などと次々に軍歌を歌って氣勢を挙げたが、何となしに本人たちの不安で切ない思いが伝わり、また陰で涙ぐむ家族たちの姿を見た後の帰りの道は寂しい思いでいっぱいであった。

こうして人手が足りなくなってくると、今度は私たちまでが実際に電気炉の仕事を

することになった。これはもう覚えだが、高さはほぼ二階の床位で、その二階部分に四メートルと十メートル位の長方形にレンガで囲まれた大きな箱方の炉の上層部が露出して、その中に大きな二本の電極の太い柱が差し込まれ、これが放電するとその熱で近くに投げ込まれた石灰と石炭が溶け、まっ赤になったドロドロのカバイトが一階部分の穴から流れ出てくるという仕組みになっていた。この炉の一带は大変な暑さで、特に二階部分に上がるとしばしばまっ赤になった石灰が辺りにとび散りしばらく立っていると着物がきな臭くなって来るというまさに熱地獄であった。私たちの仕事は二階で電極部分の石灰と石炭が溶けて下に沈むと、その凹んだ部分を目掛けてスコップで石灰と石炭を放り込むという仕事だった。これは危険を伴う重労働であったばかりではなく、私たちはこの仕事を昼夜三交代制でやることになったのである。

私たちは工場の近くの寮に宿泊してこの労働に従事した。当時、食事は配給制で家では雑炊を食べて飢えを凌いでいたが、少なくとも寮では三度の食事があり最初は米の御飯であったが、やがて麦の入った食事が出るようになった。おかげでお腹を空かすことはなかったが、とにかく重労働で働いた後はただ寝るだけの生活をしていたのである。電気炉の仕事はとにかく暑さで汗をかくので、塩水をはがぶがぶ飲んだりあるいはおにぎりにつぶし塩を付けてた。仕事の後作業着や防護用の防止や顔を覆う手拭いはびしょと濡れて、毎回のように洗っておく必要があった。時々疲れて洗うのを怠けて作業着などをそのまま炉の近くにかけて干しておく、翌日は汗で濡れた部分が白く塩の跡がついているという具合であった。

1945年の冬はまれに見る大雪で、町並みはすっかり雪の中に埋もれてしまった。わたしたちは夜勤明けには2、3日の休みを与えられ皆数週間ぶりに自宅に帰るのを楽しみにしていた。しかし、この冬はしばしば汽車は大雪で立ち往生し、わたしは勤労働員で宿泊していた黒井の工場から高田までの10キロあまりの雪道を歩いて帰らなければならなかった。3、4時間も歩いてへどへどになって夕闇が迫る頃、そろそろ高田の雁木(がんぎ～現代風に言えばア・ケ・ド)の町並みに入っているはずだと思っていから見渡しても白い雪が見えるだけだった。よくよく下を見ると足下から光が漏れてくるのが見えてほっとした経験はいつまでも忘れることができない。道は屋根からおろした雪で、二階の屋根くらの高さになり電線をまたいで歩いたことを覚えている。

父は聖公会の牧師で、私たちは牧師館に住んでいたが、敗戦の二年前位から礼

拝に出席する信徒の数は減少し、熱心な2、3人の信徒を除けば、あとは私たちの家族だけであった。いや、しばし家族礼拝と呼ぶ方がいいような状態であった。父は信徒たちをよく訪問していたが、戦争が深まるにつれ思想犯係の特別高等警察の者がいつも尾行し、父が去った後に警察官がやってきて、今牧師はどんな話をしていたか、教会にはあまり出入りしない方がいいという趣旨のことを言い残していったというわけであるから、信徒たちが礼拝出席をためらうようになったことを、私には非難する気持ちはない。おそらく自分もあの状況の中では、恐怖が先立って同じような態度を取ったろうと想像するからである。またその頃から、毎朝警察官が牧師館にやってきて、父の在宅を確かめに来るのが日課となった。

さて、1945年は正月からとにかく屋根の雪下ろしで明け暮れたのである。それまでは人を頼んだりあるいは信徒たちの応援を得たが、もはやそのような状態でなくなっていた。なにしろ人手が足りず、牧師館だけではなく教会と幼稚園の雪下ろしが、私たち家族のほとんど三ヶ月間にわたる毎日の日課となった。ようやく全部の屋根の雪下ろしが終わるとすでに前に雪下ろしをした屋根の雪は背の高さを遙かに超えていて、しばしとの開け閉めができなくなった。私も工場の休みの日には帰宅して雪下ろしを手伝った。こんな体験は二度とたくない、というのが私の率直な実感である。

その年の春、私は体が不調となり、医者から重労働を禁じられ、ようやく一年半の肉体労働から解放されて、今度は事務所で慣れないソロバンで計算をする仕事が与えられたのである。当時私は、周囲の人たちが子供の私に対して何となくごちない、そして遠慮がちな態度を示していたことには気付いていた。私がクリスチャンであることを知っていたのだろうが、そのことで不愉快な思いをすることはなかった。戦争の状況はけわしくなり、東京の空襲が始まった。そして、あの田舎の信越科学にもグラマン戦闘機がやってきて、数発の爆弾を落していった。

そして8月15日がやってきた。私たちはお昼に全員事務所に集まりラジオ放送を聞くように課長にいわれた。これがあの有名な「終戦の玉音放送」であった。私たちには天皇の甲高い独特の抑揚のある声は、あまりよく聞き取れなかったが、とにかく戦争が終わったことだけは分かった。その直後課長が私の側にやってきて、「塚田君、君はアメリカ人たちをよく知っていると思うが我々はこれからどうなるのだろうか。彼らは我々を殺すだろうか」と心配そうに尋ねてきた。私はこの時、この気の弱い課長が私の父が牧師であることをおそらく中学の教員から通報されていたことに気付いて、はっとした。私はいや、少なくとも私の知っている外国人たちはそんなことはしな

いと思いますよ、やつのことで答えた。

翌日、私たちは荷物を片付けて家に帰るように言われた。9月から再開された中学校の勉強は2年間の空白でほとんど初めからやり直さなければならぬほどに全く遅れていたことを知った。4年生の教科書のどれを見てもさっぱり分からない状態であった。しかしそれ以外にも、ついこの間まで現人神、あらひとがみ、天皇、八紘一宇、神国日本、教育勅語をいつも口走っていた教師たちが急に民主主義を唱え出したのには、驚き以上に人間への深い不信感と虚無感を感じざるを得なかった。しかし、よく反省してみれば、自分とても表面上は適当に忠実な天皇陛下の臣民であるかの様に装ってきたのであるから、大同小異であることにも気付いたのである。言ってみれば、今はやりの1億総マインドコントロールの時代であったのである。こんな時代を二度と味わいたくないし、またこれからの世代の人に味あわせたくないというのが、今の私の心からの願いである。



神よ、あなたは私を導き

あなたの働きの中に加えてくださいます

私を信頼し、大切にしてください

あなたと共に働くものとして育ててください

あなたに従って、力の弱い者となり、

また、危険を恐れないで進む者となれますように

どうか私を力づけてください

そしてこの世界を、あなたと共に

変えていくことができますように アーメン

(Christian Aid)

司祭 鈴木 勉

1945年3月10日、それは私が最も強烈に、そして直接的に15年戦争を体験した日でした。1945年は大変寒く雪の多い日でした。3月9日から10日にかけての東京大空襲は、一晩で十萬の死者を出したと言われています。当時中学校入試直前であった私は、一応それなりの受験準備の勉強をしていましたので、夜中に警戒警報が鳴っても、母は最後のぎりぎりまで私の勉強をさまたげないようにしてくれました。空襲警報が一時解除され、今晚の空襲は大したことはないと言われ、布団に入ろうとした瞬間に、ラジオから房総半島沖合に多数B29を発見、という東部軍管区情報が鳴り響きました。当時の子どもたちの誰もがそうであったように、普段の訓練どおり暗闇の中で衣料を着用し身支度を整え、家族はそれぞれ部署につきました。といっても私は六年生の子どもですから何の役割もなく、玄関の地下に掘られた防空壕に受験関係の資料を持って入ることでした。その頃になると、もうすでに米軍機の爆撃は始まっています。焼夷弾は、最終的に地上に落下する時には直径15センチメートル、長さ40センチメートル位の六角形の筒となり、地上で炸裂するのですが、B29から投下される段階では、それは何十本とまとめられ、円筒形の大きな爆弾のような形態で投下されるのです。それが空中で一本一本に分かれるのですが、防空壕に聞いていると、遠来の雷のように、またタン板を叩く豪雨のようにザーッと大音響を伴って、一面に降ってくるのです。地上に落下した瞬間は3~5メートル



位はね返って、それは見事な花火のようで、少し離れて見ている限りはきれいな見物でした。それを眺めてどのくらい時間がたったのでしょうか。私は玄関を飛びだして、広い道路の四つ角の真ん中に落ちた焼夷弾を一生懸命消していました。そこへ父親の大きな叱声がかかりました。「勉、馬鹿者、道路の真ん中には他に燃える物はないのだから消さなくていいんだ、家に戻って来い。」すぐ裏に間借りしていた義兄は、自分が間借

りしている建物に落ちた焼夷弾を、必死で消していたと思いますが、もう既に連絡は取れませんでした。すぐ上の姉は三階のベランダに出て、屋根に落ちた隣家との間に落ちた焼夷弾を、知らせたり消したりしていました。そして彼女も自分でいつ退避するかを判断を委ねられていました。ただ避難所はラシャ場の西側の原っぱと申し合わされていました。父は玄関から母を階下に呼び下ろしました。母は何としたことか、買い置きでまっさらの座敷蓐をかかえて降りてきました。又父の馬鹿者が炸裂しました。「家が焼けてなくなるのに座敷蓐を持って逃げてどうする。」誰もが無我夢中でした。父は玄関で母と私に先に逃げろ。ラシャ場の西側でなく、千住大橋を越えて足立区宮本町の正和自動車の樽沢のところへ逃げろと言いました。何故ならばラシャ場の方へ向かう千住間道は既に火が回っていて、千住大橋方面は風下で火の気がなかったからです。この時母が猛然と反対しました。「駄目です。風上に逃げなくちゃ。」おそらく父もこの時非難の鉄則を忘れ、動転していたにちがいない。もし風下に逃げていれば、樽沢邸はもとより北千住一帯はその後火の海になったことを考えると、無事に千住大橋を越えられたかどうか疑問に思います。千住間道に逃げる前に、鎖に繋いであった秋田犬のタ口を解放しました。「また戻ってこいよ。」母と私は布団をかぶって12、3メートル幅の千住間道の片側の二階長屋が焼けて崩れ落ちるような状況の中を、道路の反対側に寄りそって少しでも熱を避けるようにしながら避難しました。それでも途中で布団を外側から抑えている手が、軍手の中で燃えるように熱くなったので、その熱を避けてその布団を内側から支えるようにしなければならぬほどでした。その布団もラシャ場の原っぱに着く頃には表面が燃えはじめようとしていました。当日使われた焼夷弾の種類は油脂焼夷弾、避難の途中の道端の防空壕を覆っているそのものが青白い炎を立てて燃えているのが印象的でした。母と二人はラシャ場の原っぱにやっと逃げおおせました。風が出てきました。東京の下町を焼きつくす紅蓮の炎を映すその煙の合間から、突如響くB29の爆音とその傲岸な機影に、朝まで不安な時を過ごしました。その原っぱには大勢の人が避難してきていました。父や姉や義兄の情報をもとに多くの人に求めました。結局、全員が再会し無事を確認できたのは翌日の夕方でした。今は跡形もなく焼け落ちてしまっているけれども、焚き火の残り火のように燃えくすぶっているわが家の焼け跡に家族がそろって戻った時、そこにタ口はいませんでした。どいあえず姉が代用教員をしていた舎人国民学校の教え子のご家庭に家族全員が一週間ほどお世話になり、足立区内に小さな家を借りて、妹も集団疎開

先から一足先に帰京させ、他の焼け出された家族と同居で住まうことが出来るようになました。義兄は焼け出されてから旬日を出ずして召集令状を受け、直ちに島根県浜田の連隊に入隊し、義兄のお世話になっていた姉は、どいあえず足立区は安全だということで母子ともに義兄と入れ代わり東京に戻りました。しかし結局足立区も安全でなくなり父を除いて一家全員が島根県に行くことになり困難な輸送事情のもと一世帯の荷物をまとめ出発した日が皮肉にも敗戦の日、8月15日でした。

『平和を祈る夕べ』証言 **私の戦争体験**

聖ルカ礼拝堂 土山 幸子

昭和20年の3月10日未明、B29による東京下町地区に大空襲がおきました。そして一般市民約10万とも15万とも言われる尊い生命が失われました。灯火管制下で殆ど真っ暗に近い東京の空が、大型の何万発もの花火でも及ばないほどに真っ赤に変貌し、深川木場地区には大火災が起き、逃げまどう人々が血と死骸の隅田川に飛び込んだりしていたそうです。

3時～4時頃になって、築地の聖ルカ病院にも次から次にどんどんと負傷者が搬入されてまいりました。全員が大きな怪我を負った方であり、その大半は15～19才の学徒勤労挺身隊の青少年たちでした。防空団員の50才を越えた人たちが、これらの負傷者を担架に乗せてどんどん運びこんで来られました。本当に次から次へと運びこまれたのです。当時の橋本委員長が「二千人を越す負傷者が運ばれて来た。」と仰っておられたのを聞いています。

次の朝、病院の東側入口に大きな掲示板が立てられ、800名以上もの亡くなられた方々のお名前が張り出されていました。私は卒業寸前とはいえ、まだ看護学生でした。当時は看護学生といえども、空襲警報があれば夜中であろうと、何時であっても直ちに受持ちの病室に行き、患者さんの避難の準備をする事が義務づけられており、夜中に何度となく起こされたこともありました。4時ごろになり大勢の負傷者が運び込まれて来ました。チャペルの前のロビーは、二本の丸太の横棒の上にベニヤ板を乗せただけの急ごしらえのベッドに布団を敷き、上には毛布を掛けるといった病棟に変貌し、35人の重症者ばかりが運びこまれてきました。最初の17才の男子学生は、右腕がすっ飛んでおり、その毛ぎ取られた後は泥が血まみれになって

おり、あまりにも酷いのでモルヒネを注射しようと思いましたが、どの患者さんもみんな大変で、35人に5本のモルヒネを誰から注射をしようかと悩んでしまいました。翌早朝、最初の17才の学生が亡くなりました。「どうして、どうして、痛みを少しでも和らげて上げられなかったのか？」と自分を責めました。もう一人の17才の学生の男の子は、ご両親が付き添っておられました。爆撃の時大きな樹木が倒れてきて、内蔵破裂ということでした。夜になった頃、天皇陛下万歳と大きな声で叫びながら息を引き取っていきました。私は、何故、お母さんと呼べなかったのだろうか、17才の少年までが、天皇陛下万歳と叫びながらでないと死ねないのかと、戦争の酷さをつくづく感じました。

ほとんどの方が大火傷で、からだの大半以上に火傷を負っておられました。小学5年と年の兄弟がおりました。2年の子は全身火傷で来院後間もなく死亡しました。5年の兄は顔面と両手両足に重度の火傷がありました。幸いなことに生命には支障があまりありませんでした。彼は、「自分たちは、家は焼け、両親も他の兄弟もみな死にました。弟と二人だけになりました。弟のベッドの側に自分も行かせてほしい。」とねだっていました。「弟が死んだことなど、とても言えませんでした。顔、手足の傷も快方に向かい、小児科病棟に移った時、弟のことを話しました。しばらく悲しんで泣いてばかりいました。彼は自分の傷痕がひどかったので、子供の頃の写真を見せて「これが僕の本当の顔だよ。可愛いでしょう。」と幾度も幾度も見せてくれたのが思い出されます。

戦争は、国と国との問題ですが、女・子供は悲しい思いをさせられているのです。戦争は、人の心を駄目にします。どんな無残な惨殺行為をも後悔なく行ってしまうのです。LSDを飲ませて前線に投入したとか、覚醒剤を注射して爆撃に行ったとか、いろいろな話を聞かされます。

日本軍人による朝鮮半島・台湾・中国などにおける惨殺・残虐行為はあまりにも有名ですが、南京をはるかに越える惨殺行為がフィリピン・シンガポールにおいても、ドイツナチスのアウスビツの惨殺と並べられる位、否それ以上ではないかと言われるような惨殺・残虐行為があったと聞かされています。警視庁をはじめ各地の刑務所や留置場では、幾人ものキリスト教信者や牧師がスパイ・非国民だのと言って殴殺されています。もし日本が戦争に勝っていたらどんな世界ができているでしょうか。考えるだけでも肌恐ろしい思いがいたします。

日本占領と同時に、アメリカのキリスト教協議会の人たちは、日本の子供たちを

救おうとかつての敵国日本の子供を飢えから救うために、政府と軍を動かし、極秘裏に育児用の粉ミルクをアメリカの乳児の分を割いて、カナダを經由して 戦時中アメリカの乳児の割当が少なかったため、もしものことを恐れてアメリカの港からでなく 大量に送ってくれました。こうした「キリストの愛」によって、今の日本人が生存し得ていることを知らされる時に、私たち日本のキリスト者は、「今、世界平和のために何をなすべきなのでしょう。祈りましょう。主に感謝。

『平和を祈る夕べ』証言 **日本軍の侵略による犠牲者三世からの証言**

カパティラン アグネス・バレストロス

私が日本に暮らし始めてから二年半が過ぎようとしているにもかかわらず、私の母は電話で話す度に日本を離れるように言い続けます。母は私の滞在中一度も日本を訪れていません。私が他の国におりました時には訪ねてくれましたのに、フィリピンに常時住んでいるフィリピン人が日本大使館からピザをもらうのはたやすくはないという事実に加えて、母にはこの国を訪ねたいという思いがまったくないのです。

日本軍が母の故郷の町を占領した時、母は九才でした。その時母は彼女の叔父の残忍な死を目撃しました。セブ島にあるカルカルと呼ばれる小さな町で、他のフィリピン人たちと共に叔父は生きてまま埋められたのでした。正座をさせられ軍人たちに憐れみを乞うように両手を組み合わせた恰好のまま..。一方で母の祖父はきちんとお辞儀をしなかったという理由で一人の日本の軍人に60回も強打されたのでした。その上ツメを剥がされ殺されたのでした。これらの出来事は母にとってぬぐい去ることのできない記憶です。憎しみの傷を彼女の心に残しました。

母にとって娘が長い間、その日本で宣教師として働きたいという願いを持っているということほど信じがたいことであったことでしょう。日本軍がフィリピンを侵略し、フィリピン人を虐待し、殺した戦争の犠牲者から私は三代目にあたります。私は祖先たちが抱いていた同じ傷を持って日本に来たわけではおられません。しかしごく最近になってある日本のやり方に怒りを感じるようになってきました。

この50年前の古い話を今日のフィリピン人と日本人の社会的現実にあてはめた時に、国家のレベルのみでなく、個人のレベルにも虐待と差別のパターンが見えるのです。この時と時代にあってもある日本人は自分たちが隣のアジアの人々より優れていると思いつけていることに気づく必要があります。カパティランというフィリピンから

の移住者たちのためのカウセンシング・オフィスでの仕事を通じて、私は日本人の夫による、また姑、舅による、あるいは雇用者、果ては公的な機関によって与えられている苦痛に繰り返し直面します。この話を始めるとそれだけでも一時間以上の討論を必要としますので、ここではこれ以上は申し上げません。

戦後50年を覚え、また恐ろしい破壊についての大変多くの議論とともに私は将来への希望に目を向けたいと思います。日本軍による侵略の記憶、また今日の日本の企業によるフィリピンの自然資源の搾取という現実がありながらも、フィピン人は自分たちと日本人との関係を断つことはできません。私たちの国は地理的に隣合っています。1986年から91年の間に届け出のあった日本人とフィリピン人の間の結婚件数は二万件です。この婚姻関係から約一万人の子どもが生まれています。これには日本人の父親に棄てられた約二万人の子どもたちの数は含まれていません。また日本の大企業、小企業に雇われているフィリピンの移住労働者は大なり小なり経済の発展に貢献しています。私たちは調和のうちに暮らす方法を見つけなければなりません。フィリピン人たちが日本人のやり方に学びつつ適応してきたように、日本人の人々も適応する方法を学ぶことができます。私たちの文化から学ぶことができます。心と思いを開いてください。フィリピンでは今年、日本軍の侵略による犠牲者を覚え、その荣誉を讃えています。マスメディアは当時の拷問の犠牲者で幸いにも生き残った人々の声を伝えています。どうぞ彼らの話に耳を傾けて下さい。しかしながら思い出すだけにとどまっていることはできません。日本の経済的搾取や文化的差別の犠牲になっているフィリピン人たちの中で、彼らの苦しい経験が新しいものに甦る時に、真実の荣誉が与えられるのです。この時代の犠牲者の物語も聞いて下さい。彼らは50年前と同じ痛みと怒りを叫んでいます。

この人々は私たちの中に住んでいます。名前も記録されずに、それゆえ搾取の対象となっています。家族や隣人から常に差別されている日本人と結婚した人々、学校で差別されている日本人とフィリピン人の間に生まれた子どもたちです。これらの人々に私たちが耳を傾け、共感し、今日の侵略、暴力の形を無くしていくよう行動しなければ、50年前の戦争の犠牲者は紙の上に命のない名前としてむなしく残るにすぎません。日本以外のアジアの文化から学ぼうと自分を開く決心をし、移住者に対するすべての形の搾取や差別とたたかうよう行動した時に、過去の犠牲者の苦しみが変革と解放につながります。そのことを通して、真実の荣誉が戦争の犠牲者たちに与えられることになるのです。

9月9日、平和を祈る夕べのつどい

司式	山野繁子執事
点火	竹田真主教、ウイリアム・ハ - ゲット司祭、斉藤美代子、井田和宣
み言葉	レナ - ト・オルテガ、キム・ヨンミ
日課	デニス・ピッツ、横山美樹
証言	鈴木勉司祭(代読井原泰男)、土山幸子、アグネス・パレストロス
奏楽	宮崎智子、香山洋人執事
詩篇	佐々木道人司祭、大畑喜道司祭、竹内謙太郎司祭
嘆願	笹森田鶴執事、岡野峻、井田涼子
MC	加藤博道執事、大井優子
アツシャ -	吉松幸子

光りの祈り

平和の炎よ

わたしたちの心を暖めて下さい。

わたしたちが隣人を愛することができますように

平和の炎よ

わたしたちの道を照して下さい

わたしたちが真実の中を歩むことが
できますように

平和の炎よ

わたしたちのただ中に

自由への情熱を燃え立たせて下さい

平和の炎よ

わたしたちを集めて下さい

あなたの命の讃美の祝いの中に



12



곡: 오순절 감사회 찬양대 곡, 가사
 曲: 聖書の讃歌, 聖書

司式者： 聖書のみ言葉を聞いて、礼拝を始めましょう

イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」(ヨハネ20:21)

司式者： 主よ、わたしたちの口を開いてください

会衆： わたしたちは主の誉れを現します

司式者： 栄光は、父と子と聖霊に

会衆： 初めのように、今も、世々に限りなく アーメン

司式者： 主をほめたたえましょう

会衆： 主のみ名をたたえます

詩篇交唱 (85:7-13)

第一日課 イザヤ書 2:1-5(日本語で朗読します)

マリアの讃歌

1 わたしの魂は主を あがめ わたしの霊は聖い主の御名を 喜びたえる
 3 いはからのちいつの代の ひとも わたしを幸いな 老女と 呼ぶ
 5 主の 力は 聖 そのあわれみは 聖の主を 敬い おおむる ひとに
 7 権力をあらう者もその 座から 降ろし 身分の低い 人を 引き上げ
 9 神は父祖アブラハムとその 子さんに 永遠に約束 されたように
 栄 光一は 父と子と せいれいに

2 神はこの 貴しい 女にも 目を 留められた
 4 力ある 力が わたしに偉大な みがを 与えた
 6 主はみ腕の力を ふるい 思ひあがる者を 打ち 散らし
 8 飢えた人を 貴い物で 満たし 富んでいる人を むなしく 追い 散らせる
 10 あわれみを 与えず しもベイスラエルを 助けられた
 はじめのように、 いまも 世々に 限りなくアーメン

第二日課 ヨハネによる福音書 15:11-17 (英語で朗読します)

シメオンの賛歌

1 主よ、今こそあなたのみ言葉のとおり しもべを安らかに 去らせて 下さる
 2 わたしは この目で 主の 救いを見た
 3 これ は主が 万民のために 備えられた 素晴らしい
 4 すべての人を照らす ひかり み民イスラ エルの えい光
 栄 光一は 父と子と せいれいに
 初めのように、 いまも 世々に 限りなくアーメン

証言言

1、鈴木勉司祭 *代読:井原泰男司祭

(深川聖救主教会管理牧師)

2、土山幸子さん

(元聖路加国際病院看護婦長、

現在同病院ボランティアコ - デイネ - タ -)

3、アグネス・バレストロスさん

(カパティランスタッフ)

「キリストの平和」(譜)

14

(Capo III) C Em F Em Dm7

G7 C Em Dm G C

使徒信經 (それぞれの言葉で唱えます)

わたしは、天地の造り主、全能の父である神を信じます。またそのひとり子、主イエスキリストを信じます。主は聖霊によって宿りおとめマリヤから生まれ、ポンテオ・ピラのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、よみに降り三日目に死人のうちからよみがえり、天に昇られました。そして全能の父である神の右に座しておられます。そこから主は生きている人と死んだ人とを審くために来られます。また聖霊を信じます。聖なる公会、聖徒の交わり、罪の赦し、体のよみがえり、永遠の命を信じます。 アーメン

献金（「在韓被爆者」のために捧げられます）

1

あなたへのいのちの _____ ど

うやにしてくたさい _____ 主

よわたしきあなた _____ の

いのちの _____ にと
1.に
2.あ
3.せ

Fine

一同 全てのものは主の賜物、わたしたちは主から受けて主に捧げたのです
ア - ヌ

主の祈り（それぞれの言葉で唱えます）

司式者 主よ、憐れみをお与えください。

会衆 キリストよ、憐れみをお与えください。

司式者 主よ、憐れみをお与えください。

司式者 主よ、主の慈しみを示し

会衆 主の救いを与えてください

司式者 主の仕え人に義をまとわせ

会衆 主の聖徒に喜び歌わせてください

「平和の器にして下さい」

司式者 主の民を救い

会衆 主の子らを祝福してください

司式者 主の平和を今の世に与え

会衆 地の果てまで、戦いをやめさせてください

司式者 主の道をあまねく地に知らせ

会衆 主の救いを全ての国に知らせてください

司式者 主よ、わたしたちの内に清い心を造り

会衆 聖霊によって支えてください

司式者 主は皆さんとともに

会衆 また、あなたとともに

司式者 祈りましょう



真理と平和の源である神よ、み子イエス・キリストはすべての人がみな主の家族として平和に生きるために、十字架により憎しみの隔ての壁を除き、主による和解の道を開いてくださいました。いま 戦後50年 を迎えたわたしたちが、自らの国のあやまちを正しく見つめ、悔い改めて、歴史を通して働かれる神の呼びかけに答えていく勇氣と力を与えてください。そして、わたしたちの教会が、主の平和を実現していくよき器となることができますように、父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

すべての聖なる望み・良い思い・正しい業のもとである神よ、この世の与え得ない平安をわたしたちにお与え下さい。わたしたちがみ心に全てを委ね、み力によりあだを恐れず、安らかに日々を過ごすことができますように、救い主イエス・キリストのいさおによってお願いいたします。 アーメン

天の父よ わたしたちは主のうちに生き 動き また存在するものです。どうか聖霊によって導き、わたしたちが日々の営みのうちに主を覚え、つねにみ栄えを現わすことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

嘆願

[アジアの人々の傷を思い起こす]

司式者 神よ、わたしたちは、アジア・太平洋戦争によって、多くの人々、ことにアジア諸国の人々に、計り知れない苦難と死をもたらしたことを、深く心に刻みます。この苦難と死が、アジアの人々にとって、つくない難い犠牲であったこと、癒し得ない傷であることを、いつも思い起こすことができますように。

会衆 主よ、わたしたちの祈りを聞いてください

[わたしたちとその国の苦難を覚えて]

司式者 神よ、戦争という国家のあやまちによって、わたしたち自身も苦難の時代を過ごしました。どうか、わたしたちがこのあやまちを繰り返さず、国の現在のあり方を改め、神のみ心がこの地上に実現するための、知恵と勇気を与えてください。

会衆 主よ、わたしたちの祈りを聞いてください

[今も続くアジア諸国の犠牲]

司式者 神よ、わたしたちは、今もなお、アジア諸国の犠牲のうえに成り立つ、満ち足りた生活に安住し、貧困や暴力、不正義から目を背けています。どうか、わたしたちが自己中心の生き方から解放され、神の家族である世界中の兄弟姉妹の苦しみ・悩み・痛みを、分かち合い、支え合うことができますように。

会衆 主よ、わたしたちの祈りを聞いてください

[核兵器の廃絶のため]

司式者 神よ、生きとし生けるものを破壊する核兵器によって命を奪われ傷つけられた人々、今なお苦しんでいる人々をみ前に覚えます。とくに広島・長崎の人々、在韓被爆者、太平洋地域の人々にあなたの癒しのみ手をさのべてください。また、現在も核実験を強行している中国、フランスの指導者を導いて、何れも先命を尊ぶ心を与えて下さい。主よ今わたしたちがなすべきことを悟り、この世界から核兵器を廃絶するために共に働くことができますように。

会衆 主よ、わたしたちの祈りを聞いてください

[あらゆる差別・抑圧の克服のため]

司式者 神よ、わたしたちは、人種・民族・文化・習慣・性の違いによって差別・抑圧を繰り返しています。どうかわたしたちが、十字架によって地上のあらゆる隔ての壁を取り除かれたみ子イエスにない、差別・抑圧を打ち破る主のみ業に仕えていくことができますように。

会衆 主よ、わたしたちの祈りを聞いてください

祝 福

主 教 恵み深い神が、戦争の犠牲となった人々に癒しを、悔い改める人々に赦しを、平和を求める人々の間に、真実の和解を与えてくださいますように。父と子と聖霊なる全能の神の恵みが、つねに皆さんと共にありますように。 ア - メ



Liturgy of Light

Flame of peace

warm our hearts to love our neighbour.

Flame of peace

light our path that we may walk in truth.

Flame of peace

rise in us with a passion for freedom.

Flame of peace

gather us together in the celebration of your life.

King of peace

Minister: Let us hear the word of scripture.

Jesus said to them again, "Peace be with you. As the Father sent me, even so I send to you." (John 20:21)

Minister Lord, open our lips.

People And our mouth shall proclaim your praise.

Minister Glory to the Father, and to the Son and to the Holy Spirit:

People as it was in the beginning, is now, and will be forever. Amen.

Minister Let us bless the Lord

People We praise the name of the Lord

Psalm(85:7-13)

Minister Show us your mercy, O Lord, and grant us your salvation.

People I will listen to what the LORD God is saying, for he is speaking peace to his faithful people and to those who turn their hearts to him.

Minister Truly, his salvation is very near to those who fear him, that his glory may

dwell in our land.

People Mercy and truth have met together; righteousness and peace have kissed each other.

Minister Truth shall spring up from the earth, and righteousness shall look down from heaven.

People The LORD will indeed grant prosperity, and our land will yield its increase.

Minister Righteousness shall go before him, and peace shall be a pathway for his feet.

All Glory to the Father, and to the sun, and to the Holy spirit:
as it was in the beginning , is now, and shall be for ever. Amen.

The 1st Lesson: Isaiah 2:1-5(in Japanese)

The Song of Mary

The 2nd Lesson: John 15:11-17(in English)

The Song of Simeon

Witness

1.The Revd. Tsutomu Suzuki(priest in charge of Fukagawa)

2.Ms. Sachiko Tsuchiyama

(former chief nurse of St.Luke's hospital,
coordinator of volunteer of St.Luke's)

3.Ms. Agnes Ballesteros(Kapatiran staff)

Peace of Christ

The Apostles' Creed (in own language)

I believe in God, the Father almighty, creator of heaven and earth;

I believe in Jesus Christ, his only Son our Lord. He was conceived by

the power of the Holy Spirit and born of the Virgin Mary. He suffered under Pontius Pilate, was crucified, died, and was buried. He descended to the dead. On the third day he rose again. He ascended into heaven, and is seated at the right hand of God the Father. He will come again to judge the living and the dead. I believe in the Holy Spirit, the holy catholic Church, the communion of saints, the forgiveness of sins, the resurrection of the body, and the life everlasting. Amen.

Offering

(for the victims of the atomic bomb who now live in Korea)

Channel of peace

All All things come from you, O Lord, and we offer to you only what we have received from you. Amen.

The Lord's Prayer (in own language)

Minister Lord have mercy.

People Christ have mercy.

Minister Lord have mercy.

Our Father in heaven, hallowed be your Name, your kingdom come, your will be done, on earth as in heaven. Give us today our daily bread. Forgive us our sins as we forgive those who sin against us. Save us from the time of trial, and deliver us from evil. For the kingdom, the power, and the glory are yours, now and for ever. Amen.

Minister Show us your mercy, O Lord;

People And grant us your salvation.

Minister Clothe your ministers with righteousness;

People Let your people sing with joy.

Minister Save your people, O Lord;

People Bless the children of you

Minister Give peace, O Lord, in all the world;

People And help your people to put an end to every war at every corner of the world. Channel of peace Minister: Let your way be known upon earth;

People Your saving health among all nations.

Minister Create in us clean hearts, O God;

People And sustain us with your Holy Spirit.

Minister The Lord be with you.

People And also with you.

Minister Let us pray.

O God, the source of truth and peace, your son Jesus Christ by his cross removed the walls of hatred that separated us so that all mankind should live in peace as members of the Lord's family, opening up the way of reconciliation in the Lord. Now, as we approach the 50th anniversary of the end of the war, we ask that you, the God who works through history, give us the courage and strength to respond to your call, so that we may truly recognize our nation's errors and repent. We ask that our church may become a tool in establishing the Lord's peace, in the name of our Lord Jesus Christ who lives and reigns forever, one with the Father and the Holy Spirit. Amen.

O God, the source of all good desires, all right judgements, and all just works: give to your servants that peace which the world cannot give: that our hearts may be set to obey your commandments, and that freed from fear of our enemies, we may pass our time in rest and quietness; through Jesus Christ our Lord. Amen.

O heavenly father, in whom we live and move and have our being: We humbly pray thee so to guide and govern us by thy Holy Spirit, that in all the cares and occupations of our life we may not forget thee, but may

remember that we are ever walking in thy sight; Jesus Christ our Lord.
Amen.

Litany

[To recall the wounds inflicted on the peoples of Asia]

Minister O God, we hold in our hearts a deep consciousness of the immeasurable sufferings and death visited upon so many, particularly the peoples of Asian nations, by the Asian-Pacific War. Help us always to remember that for the peoples of Asia this suffering and death is a sacrifice beyond atonement and a wound that cannot be healed.

People O Lord, hear our prayer.

[To recall our own and our nation's suffering]

Minister O God, our nation's error in waging war brought a time of suffering for us, too. Give us the wisdom and the courage to avoid repeating this error, to change the present state of our nation, and to bring about your will on earth.

People O Lord, hear our prayer.

[The ongoing sacrifice of Asian nations]

Minister O God, now more than ever, we owe the stability of our lives, wanting for nothing, to the sacrifices of Asian nations, while we turn our eyes from poverty, violence and unrighteousness. Free us, we pray, from self-centered ways of living, and let us share in the pain and suffering of our brothers and sisters around the world, the family of God, and enable us to support them.

People O Lord, hear our prayer.

[To abolish all nuclear weapons]

Minister O God, we remember all those who lost their lives; were injured, and are still suffering from nuclear weapons which can destruct all the creatures

on earth. Give your healing hands to the N-bomb victims in Hiroshima and Nagasaki, Korean victims, and those the Pacific region. Lead the Hearts of the leadership of China and France, who are forcing nuclear tests and let them choose Life more than anything else. Lord, help us to know what we should do now, and to work together towards total abolishment of nuclear weapons.

People O Lord, hear our prayer.

[For an end of discrimination and persecution]

Minister O God, we have repeatedly discriminated against others and persecuted them on the basis of race, nationality, culture, customs and sex. We pray that we may follow the example of the Lord Jesus, who on the cross took away all the walls of separation between us in the world, so that we may serve the Lord whose work does away with all discrimination and persecution.

People O Lord, hear our prayer.

Blessing

Bishop May God all-merciful heal those sacrificed in war, forgive those who repent, and give truth and reconciliation between those who seek peace. The blessing of God Almighty, the Father, the Son, and the Holy Spirit, be with you always. Amen.

教役者会から

幹事長 司祭 近藤 幸平

9月11日、午後2時より教区会館にて教役者会が開かれ、竹田主教、戦後50年ワ - キンググル - プのメンバ - と共に、8月6日の教区主教めっ背 - 時 平和を願ってこれを追ひ求めよと、9月9日の礼拝 平和を祈る夕べのつどい の式文をめぐって話し合いがなされた。

主教メッセ - ジについては、「全ての戦争は無意味な人間の行為です。戦争犠牲者は人間的に言えば無意味な死を遂げたのです」という一節をめぐって、抵抗を感じている信徒の存在が報告されたが、これに対して、無意味な死であるからこそ、この死を意味あるものにしていく責任が、まさに今我々に問われているのではないか。アベルの血が、我々に語りかけているのは、無意味な死に対して我々が負わねばならない責任は何かということではないか、等の意見が述べられた。式文「戦後50年を覚えて」については、ワ - キンググル - プメンバ - より天皇制に言及できなかったことが心残りである、50周年というより先もっと根本的な問いかけを訴えたかった、との率直な発言があった。

他の教役者からの発言としては、この式文と各個教会の日常との距離が信徒の中に不安や動揺を産み出す可能性が指摘され、それに対して、この式文と一致する日常はいつ作られるのか、との問題提起がなされた。その他、様々な状況に対する諸祈祷の増補版を作ってほしいとの要望、代祷・連祷の内容で十分に戦争の背景に触れられていないと思うがどうしてか、等の感想や質問がなされた。

外濠教会グループの取組

司祭 大畑 喜道

外濠教会グループ(目白、諸聖徒、聖テモテ、聖バルナバ)では、8月5日(土)〜7日(月)まで、伊豆天城山荘で合同のキャンプを行った。今回は昨年に引き続き2回目。特に今年は東京聖テモテ教会の姉妹教会であるフロストバーク聖ヨハネ教会(メリーランド)からの訪問団も参加した。外濠教会グループキャンプ実行委員会では、キャンプのメインテーマを決める際に、戦後50年を意識したテーマでとの議論がでて検討がなされた。メリーランド訪問団17人とのプログラムの作成に難航した。言葉の壁もあり、短い時間の話し合いや討論をするよりは、毎日の祈りの中で平和について黙想すること、平和を意識した歌などをしおりに印刷し折に触れて歌うこととした。また8月6日に合同の聖餐式を行い、竹田主教のメッセージと平和の代祷を捧げることし、具体的な式文については牧師協議会に一任された。牧師協議会では特別な式文を作ることはせず、戦後50年の委員会の作成したものをを用いることとした。訪問団には英文の訳文を作ることとした。

8月6日(日)は朝6時半から竹田主教のメッセージを聞き、各5教会の代表が朗読。その後、黙想する時間が設けられた。7時から聖餐式、司式は日米の四司祭。分餐は同じく日米の信徒奉事者が担当し、代祷も日米両国語を用いた。原爆投下の部分について一緒に祈ることができるかどうか危惧する意見も出されたが、メリーランド側から「一緒に祈りましょう。私たちも平和を求めて祈ります」とこの部分を積極的に分担された。

奇しくも「キリストの平和」の歌がキャンプのテーマソングのように集会のたびに手話を交えながら歌われ、言葉の壁を歌が執りなしてくれた感があった。

準備の時間やスタッフなどの不足のために十分なプログラムを作成することはできなかったが、外濠教会グループでは目白がグッドシェパード教会、諸聖徒教会が王なるキリスト教会との間にそれぞれ姉妹関係があり、今後それらの教会とも共同してこの課題と取り組んでいきたい。

**地の果てまで主よ、あなたの平和を
東京教区戦後五〇年ワーキンググループ報告**

編集・発行 東京教区宣教委員会
戦後五〇年ワーキンググループ

発行年月日 1995年11月4日